

から、さらに發展することを願ひ、本書がそのための大きな貢獻であることを讃え、その出版を慶祝したい。

一九九四年 三月 十日

駒澤大學佛教學部教授

奈良康明

本書の發刊に寄せて

日本におけるインド哲學・佛教學の研究は、明治以降、ヨーロッパのアジア學(インド學・中國學等)を導入することによって近代化されたと言つてよい。また、それに対応して、高等教育機關として、國立大學の「印度哲學科」、私立大學の「佛教學科」等が創設され、徐々に整備されていった。そこでは、日本の佛敎的文化あるいは佛敎界を背景として、アジア諸地域にわたる佛敎についての研究者、ヴェーダーンタ哲學を中心とするインドの哲學についての研究者が、多數養成され、多くの研究成果を生んできた。この間、日本の研究者は、自己の文化的・宗教的なアイデンティティーを追求しながら、同時に、ヨーロッパのアジア學の方法を參考にして、佛敎とインドの哲學・宗教思想に關して客觀的な認識を獲得することに努力してきた。

ところで、周知のように、インドに發生した佛敎は、日本のみならず、それが傳播されたアジア諸地域において、重要な文化的ファクターとなっている。そして、それについての認識は、近現代の日本においても一樣ではなかつた。當初はインドの佛敎、東アジアの佛敎といえども、日本佛敎の立場から、どちらかと言えば、主觀的な研究がなされがちであつた。それに對して、インドの佛敎をインドの歴史のなかに置き、また東アジアの佛敎をその歴史のなかに置いて客觀的に、換言すれば地域研究の方法を加味して、研究するようになったのは、日本における佛敎研究の長い過程において、そう古いことではない。この点は、インドの哲學・宗教思想の研究に關しても共通して指摘できるであろう。

日本の研究者が歐米の研究者よりも有利な点は、中國語資料を比較的容易に利用できることである。この利点が逆に作用したと見ることもできる。日本におけるこの分野の研究の歴史のなかには、誇るべき研究成果も多い。

その反面、特に日本人の「アジア」についての認識のブレとの関連では、反省すべき側面が少なくないのである。

そして、現在日本の研究者に求められるのは、客観的な研究方法のさらなる進展を計るとともに、同時にインド哲学・佛教思想の現代的な意味を追求することであり、しかも、その作業を国際的な視座から行なうことであろう。

さて、この度、本書によって、日本におけるインド哲学・佛教學研究の状況が韓国に韓国語で紹介されるという。このことは、學術の国際的交流にとって極めて有意義であると私は確信する。私個人としては、本書を通じて、日本における研究が韓国人研究者の目から見た場合どのように映るのか、それを知ることができるのも、楽しみのひとつである。

思えば、かつて私自身が東京大學大學院の學生であった1960年代、中村元先生（現東京大學名譽教授）のもとで、私は海外からの留學生數人とともに机を並べて勉強した。

それから三十年。私は現在東京大學大學院印度哲学印度文學専攻の主任として、非力ながらも教育・研究について責任ある立場に立っている。そして、この専攻には、修士課程に18名、博士課程に23名、合計41名學生が在籍する。そのうち、外國人學生はそれぞれ5名と8名、合計13名であり、全體として30%を越える。このようないまだかつてない外國人學生、就中韓国人學生の比率の高さを、われわれはいま初めて経験している。學生レベルでの国際交流は急速に進んでいるのである。そして、他の大學においても、事情は同じと言ってよい。今後もこの国際交流の環はますます広がっていくであろう。

このような状況のもとに本書の刊行を見ることは、時宜を得たものであり、心から歓迎する次第である。

1994年 4月 21日

東京大學文學部インド哲学佛教學研究室
主任教授 江島 惠 教

激励のこたば

このたび、ソウル大學校の崔柄憲教授のもとに、いま日本の大學院で勉學に努めている韓国の留學生諸君が結集し、日本におけるインド哲学・佛教學研究の動向を韓国の方方に紹介する一書を編むと聞く。私どもにとってまことに嬉しいことであり、また有難いことである。

私がこの分野の研究を志したのは、もう30年以上も前になる。そのころには、韓国からの留學生はきわめて少なく、私が學んだ東京大學大學院の印度哲学専門課程には一人もおられなかったと思う。それから五年ほどして、現在、韓国精神文化研究院教授の職あられる金知見先生がその博士課程に入ってこられた。當時は大學紛争の嵐が吹き荒れていて、落ち着いて研究に勵むような雰囲気ではなかった。しかし、新しい時代を見据えつつ、研究への意欲だけは盛んであった。そして、この意欲を支え、私の韓国佛教への關心を次第に深めてくださったのが、その金先生である。金先生は、私と同じ華嚴思想を専攻していたこともあって、ときには私があるところ住んでいた旃檀寮という學寮にまで押しかけて來られ、熱心にお話されたり、質問されたりした。以來、金先生には今日まで親しくお付き合いをいただいているが、これが韓国の多くの先生方や留學生諸君と私の深い縁の、目に見える形での端緒であったと思う。

1993年度現在、私どもの東京大學文學部印度哲学研究室は、留學生だけで13名の大學院學生と4名の大學院研究生を抱えている。このうち、韓国からの留學生は9名である。私が學生であった時代に比べて、文字通り隔世の感がある。そしてこのことは、指導・助言の不十分さに對する危懼の思いを絶えずもちつつも、私どもにとって大きな喜びである。なぜかといえば、とりわけ現代において大切な學問を、國境と民族のわくを越えて集い合い、カルチャー・ミトラ(よき友) 同士として大勢で學び合うというこ